2025 年 8 月 24 日
市川福音キリスト教会

マタイ 26 章 26 節
「永遠を心に」

マタイ 26:26　また、一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、神をほめたたえてこれを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」

＊＊＊

前回から「聖餐式」をテーマに３回シリーズで学び始めまして、今回はその２回目になります。

前回申し上げたのは、アイコンとアイドルの違いということでした。聖書には「形あるもの」意味するギリシャ語が二つある。エイコーンとエイドーロンである。エイドーロンというのはアイドルという言葉の元になったギリシャ語。それ自体が最終的な目的物・崇拝物・所有物とされる「形あるもの」。エイコーンはアイコンという言葉の元になったもので、目に見えないより高次の価値あるものとの接触点として機能する「形あるもの」です。

聖書が一貫して主張するのは、「形あるもの」はそれをアイドルにしてはならない。つまり、それ自体を最終目的物・崇拝物・礼拝対象としてはならない。「形あるもの」はアイコンとして用いなければならない。それ自体が大事なのではなくて、それを通してより高次元の、普遍的・永遠的価値を持つものに触れる「窓」として用いなければならないということでした。

そして、ここが大事なところですが、聖書はイエスというお方を目に見えない神のアイコンとして私たちに紹介しているということでした。鍵になる聖書箇所はコロサイ１章 15 節でした。

コロサイ 1:15　御子は、見えない神のかたち（エイコーン）であり、すべての造られたものより先に生まれた方です。

ここで「かたち」とひらがなで訳されている言葉がエイコーンですね。私たちはイエスを最終礼拝対象とするのではなく、イエスを接触点として目に見えない神様と繋がることが大事だということです。イエスが語る言葉は目に見えない神様が語る言葉。イエスがなさることは目に見えない神様がなさること。そのようにイエスを見ることで創造主なる神

様がどんなお方かを知って、その神様を信じるということが大事なのであるということを申し上げたわけです。

これが聖餐式との関係でなぜ大事かというと、聖餐式において私たちが食べたり飲んだりするパンとぶどう酒も、それ自体をアイドルとしてはならない。すなわち、それ自体が何か特別な魔力のようなものを持った物体として扱われてはならない。むしろ、それに与ることで、私たちは肉眼では見えないより高次のものを心の目で見て行かなければならない。その「より高次のもの」とは、聖餐式の場合、十字架で死んで復活されたイエス様を通して示された神様の愛と憐れみ、力と栄光に触れていくことが大事なのです。

私たちは聖餐式において、決してイエスの肉片や血液を食べたり飲んだりするわけではなく、パンとぶどう酒という「形あるもの」を通して、目に見えない復活のイエス様、そしてさらにイエス様を通して創造主なる神様の愛を心の目で見る。そのことが大事だ。これが前回お話したことでした。

＊

それで今回ですが、今回は前回少し予告しました通り、「言語の使用法」「言葉の使い方」についての考え方の違いについてお話したいと思っております。聖餐式と言語の使用法とどうして関係があるのかというふうに思われるかもしれませんが、実は、宗教改革時代の聖餐式に関する議論では、今日の聖書箇所として引用しましたマタイ福音書 26 章 26 節の中でイエス様が「これはわたしのからだです」とおっしゃった言葉の解釈が中心となったからなのです。

マタイ 26:26　また、一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、神をほめたたえてこれを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」

「これはわたしのからだである」というイエス様の言葉をどう理解するか。ここで「これ」というのは「パン」のことですが、そのイエス様が手に持っているパンとはどういうパンか。からだ「である」というこの「である」はどういう意味か。そういうことが延々と議論されたのです。後でその議論を具体的にご紹介しますが、その前にどうしてもリアリズムとフォーミズムの言語使用法について理解していただかないといけませんので、ちょっと回りくどいですが、お付き合いいただきたいと思います。

前回の話の最初の方で、「雪が溶けたら何になる？」と聞かれて「雪が溶けたら水になる」という答えと「雪が溶けたら春になる」という答えが可能だが、前者はシンボリック・リ

アリズム、後者がシンボリック・フォーミズムという言葉遣いだということをちょっとお話したと思います。

「シンボリック・リアリズム」――この場合「シンボル」というのは、例えば設計図面とか楽譜とか数式とか言語というものが意味されているのですが――というのは、シンボル（まあ、記号と言ってもいいのですが）は、リアリティ（現実）を記述する（書き記す）もの・映し出すものだと考える。リアリティを記号によって書き表すと考えるのを、シンボリック・リアリズムと言います。

たとえば、実際の建物と設計図の関係が一つのシンボリック・リアリズムのモデルです。設計図を見ると、この線は柱を表していて、この線は電気配線でと言うように、設計図と実際の建物とが一対一に対応するわけですね。目の前にあるシンボル（図面の場合は線とか矢印とかですが）が、実際の建物すなわち現実（リアリティ）と直結している。ですから、設計図を見ればどんな建物が建つかがわかりますし、建物を設計図面に書き記すこともできるわけです。

音楽と楽譜の関係でもおわかり頂けると思います。音符と実際に演奏される音（リアリティ）とが一対一に対応している。ですから、楽譜を見ればどんな音楽かがわかりますし、音楽を表現したければ楽譜にすればいいということでもあります。シンボリック・リアリズムというのは、そういう発想なのです。シンボル（「記号」と言った方がいいと思いますが）とリアリティとが直結しているわけです。

で、このリアリズムは何か物や作品を作り出す際には欠かせない考え方ですし、人が心の中に描いている音楽や作品などを他の人に示す場合、つまりコミュニケーションということを考えるときには、とても大事な考え方になります。

例えば、図面が書けないとか読めない建築家がいたらどうなりますか。建築の世界を勉強できないですね。また、本人の頭の中にいかにいい建物があろうが、それを図面に起こせなければ、第三者にはその人がどんな建物を建てようとしているのか伝わりませんし、作業員さんや職人さんに指示を出すこともできません。音符が書けないとか読めない作曲家がいたらどうでしょうか。音楽の世界を十分には理解できないでしょうし、その人の頭の中には音楽があっても、人には伝えられません。数学のできない理論物理学者はどうですか？　これも他の物理学者が何を言っているか理解できませんし、自分の理論も伝えられません。

こういうのと同じように、言葉を正しく使えない人間は、世界がどうなっているのか理解できないし、世界がどうなっているのか人に伝えられない。リアリストはそのように発想するわけです。

「雪が溶けると水になる」という文はリアリズムだと申し上げました。こっちに「実在の世界」（リアリティ）というものがあって、それが言語でもって書き記されている。これは科学技術・情報処理・法律などの世界で当たり前のように用いられている言葉の使い方です。

しかし、このリアリズムは科学技術の世界や情報処理、行政や法律の世界などで用いられている間は問題ないんですけれども、この発想で神学をしようとすると問題が出てくるのです。神学というのは、神とか天使とか霊とか、科学の対象にはならない事柄を扱うんですね。ですから、リアリティ理解（これは実在する。これは本当にあると考えるもの）が違ってしまうと、話が噛み合わなくなるという問題が生じるのです。

例えば、皆さんが「実在する」と思っているものには何があるでしょうか。ここに机、椅子、ピアノ、スクリーン、プロジェクターなどがありますが、これらはみな実際にここにある、実在するものだと皆さん同意してくださると思います。「今ここにこれがあると見えるのは錯覚かもしれない」とおっしゃる方があるかもしれませんが、そういう方でも、この世の中に、机とか椅子とかピアノなどという事物が実在するということを否定される方はないと思います。

では、火の鳥、不死鳥、ユニコーン、天狗、ナマハゲなどはどうでしょうか。これらを実在すると考える人はおられますか？　おそらくいないでしょう。これらは神話とかおとぎ話、寓話・民話の世界で考え出された存在ですね。

では、阿弥陀如来、不動明王はどうですか？　仏教の人は実在すると言われるでしょう。神様、聖霊、天使、悪魔、天国、地獄、これらはどうですか？　これらを実在すると考える方はどのくらいおられますか？　意見が別れますよね。実はここがリアリズムで神学する場合に問題になるところなのです。何をもって実在とするかが、クリスチャンとクリスチャンでない人とで違うんだということ。シンボリック・リアリズムに立っていますと、クリスチャン世界の中だけで生きていれば問題ないですが、クリスチャンでない人と話をすると、すぐにこの壁に直面するのです。

聖書を受け入れてない人にとって、神とか聖霊とか天使とか悪魔、天国、地獄というのは、火の鳥とかユニコーンなどと同じように人間が想像力によって創作した存在にしか思えないのに、クリスチャンはそれらを実在するものと決めつけて話をすると思えるわけです。ですから、議論が噛み合わないのです。話をすればするほど溝が深まって、議論が白熱すると最後は喧嘩のようになります。熱心なシンボリック・リアリストと宗教の話をしていると最後は喧嘩のようになるんですね。

いわゆる「原理主義者」というのは、例外なくシンボリック・リアリストです。聖書に

してもコーランにしても、言語で表現されていることがそのままリアリティだと決めつけていますから、対話にならないんですね。シンボリック・リアリストがみんな原理主義者ではないですけれども、原理主義者はみんなリアリストです。「相手が何と言おうが、これが真実なんだから、仮に暴力で言うことを聞かせても、それがむしろ相手のためになるんだ」と原理主義者は考えるのです。

つまり、リアリズムは信仰者本人の信仰維持とか本人の確信を強めるためにはいいのですが、対話とかコミュニケーションに用いる考え方としては不適切で、独りよがりの思想家・思い込みの激しい熱狂者を作り出してしまいかねないという欠点があります。

リアリズムが扱う対象が物理的なものであるなら、それは現物を示せばいいので議論の余地があるのですが、扱う対象が目に見えないもの、数式にならないもの、化学式で表現できないものになると、もう言い合いにしかならないのです。強い者勝ち。年齢が上だとか立場が上だとか義理があるとか力が上だとか、とにかく真理以外の要素でもって押し切れる人の勝ちになってしまうのです。

さて、これに対してもう一つの立場として、前回ちょっとお話したシンボリック・フォーミズムという立場があります。「フォーミズム」というのは聞き慣れない言葉だと思いますけれども、これは「フォーム」という言葉（これは「形作る」という意味ですが）から来ているもので、シンボルが人の心の中にどういう世界を形作るかに注目する考え方です。聖書で言うならば、テキストが言葉によってどういう世界を描き出そうとしているか、あるいはテキストに接する人間が、テキストを通してどういう世界を心に形作るかに注目する立場のことです。詩文学における言葉の使い方がこれです。

「雪が溶けたら春になる」という文はフォーミズムだと前回申し上げましたが、「雪が溶けたら春になる」という文は、「冬が終われば春になる」という文とは、大きく違いますね。「冬が終われば春になる」という文は、季節の移り変わりを語るリアリズムですが、「雪が溶けたら春になる」というのは、フォーミズムです。なぜかと言いますと、「雪が溶けたら春になる」という文の中の「雪」とか「溶ける」とか「春」という言葉は、その言語表現と意味とが一対一対応ではないからです。

「雪」一つとっても、それは雪国の人にとっての冬の寒さ、冷たさ、空の暗さ、雪かきの大変さ、出稼ぎに行って主人不在の不安感、屋外に出られない生活の大変さ、精神的抑圧感など、本当に多様な思いを連想させる言葉になっています。「春」にしても、明るさ、暖かさ、抑圧からの解放、希望など、雪国における冬の終わりと新しい始まりのイメージが結びついているものです。

ですので、この言葉遣いには、そういうふうに言葉を使う人のキャラクターが滲み出て

来るのです。「雪が溶けたら」と聞いて「春になる」という言葉がサッと出てくるということに、その人がどんな人生を歩んで来たかが滲み出ますね。南国の人からは、こういう表現はサッとは出て来ないものです。

ですから、このフォーミズムというのは、別の言い方をしますと、ある事柄に自分なりの意味づけをする時の言葉遣いだとも言えるのです。「雪が溶けたら春になる」というふうに言う人は、「雪」という言葉に、その人なりの意味を与えているんですね。私にとって「雪」はこんなイメージなんだ。「春」はこんな意味を持つんだということが、「雪が溶けたら春になる」という文で示されるわけです。

で、聖書で言いますと、たとえば神様がご自身のイスラエルへの愛を表現する時に、このフォーミズムの言葉遣いが見られます。イザヤ 43 章 3 節をご覧いただきたいと思います。

イザヤ 43:3　わたしはあなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。わたしはエジプトをあなたの身代金とし、クシュとセバをあなたの代わりとする。

この言葉をリアリズムで理解したらどうなりますか？　つまり、客観的事実の記述としてこの文を理解したら、「神様というのはイスラエル民族を救うためならエジプト人やクシュ人やセバ人などは身代わりに死なせるお方だ。聖書の神様は民族差別主義者だ」ということになってしまいますね。

しかし、フォーミズムで理解したらどうですか？　これは神様がイスラエルに、「わたしがどれほどおまえたちを愛しているかを知ってほしい」という思いを表現するために言葉を紡いだものだということになるわけです。「イスラエルの民はわたしにとって、これほどかけがえがないんだ」という神様の愛情表現だと理解できます。これが「かけがえのなさ」の表現だというのは、すぐ次の 4 節を読めばわかります。

イザヤ 43:4　わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。だから、わたしは人をあなたの代わりにし、国民をあなたのいのちの代わりにする。

要するに神様は「わたしの目にはあなたは高価で尊い。」「あなたはわたしにとってかけがえのない存在なんだ。わたしはあなたを愛している」ということを伝えたい。そのことを表現するための修辞法として使われているのが、ここでの比較表現だということです。

愛情表現というのは、このように比較表現によって表されたりする場合がありますが、それは決して字句通り、客観的事実の記述としてのものではありません。あたかも相手を誰かと比較して「あなたが他の人よりも大事だ」と言っているかのようであって、実はそこには「比較による優劣査定」という概念は入っていないのです。そのことに気づかないと大変な読み間違いになります。

「本当の愛は比較を超える」とか「本当の愛は相手を比較をしない」ということを私たちは聞きますね。本当の愛というのは、愛する相手が他の人よりも優れている間だけ愛するとか、愛する相手が落ちぶれたら愛するのをやめるというようなものではないですよね。我が子が成績が優秀な間だけは愛するが、成績が落ちてきたら愛さないというような愛は、本当の愛ではないと、人間でさえわかります。ましてや神様が私たちを愛するとおっしゃる時、そこに比較による優劣査定のような意味合いはまったくないのです。

たとえば誰かが「僕の妻は世界一の女性だ」とか「うちの子は世界一だ」などと言ったとしますと、それをリアリズムで理解したら、「この人はなんと世の中を知らない人か」ということにならないでしょうか。「他にも立派な女性はたくさんいますよ、立派な子はたくさんいますよ」ということになるからです。けれども、これはそういうリアリズムではないわけです。客観的事実の記述ではなくて、私にとってこの女性はかけがえのない大切な人だという、本人にとっての意味づけが「私の妻は世界一」「私の子は世界一」という表現となって表されているということなのです。

こういう表現は聖書の中に他にもたくさんあります。1 匹の羊と 99 匹の羊の話。2000 匹の豚に 6000 もの悪霊を乗り移らせて殺してしまった話。極め付けは「この方以外に救いはありません。世界中でこの方以外には人間が救われるべき名としては、どのような名も与えられていないからです」というペテロの言葉です。使徒の働き４章 12 節ですね。

使徒 4:12　この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」

これをリアリズムで理解すると、比較宗教的な排他主義の言葉にしかならないですね。ペテロは仏教のことも知らず、イスラム教は世の中に存在すらしていなかったのに、そんなことにはお構いなく、「イエス・キリストだけだ」と偉そうなことを言ったに過ぎないことになってしまいます。

この言葉は、ペテロのイエス様に対する信仰告白・愛の告白として読むべき言葉です。何も他の宗教と比べて言っているわけではない。イエス様が自分の救いにとってどれほど

かけがえのないお方か。天の神様がどれほど謙遜になって私に和解の道を与えてくださるお方か。どれほど憐れみ深く、私の苦しみを共に味わおうとしてくださるお方か。どれほど忍耐強く私の裏切りを赦し、立ち上がれるよう導いてくださるお方かを教えてくださるお方として、このお方を知れば十分だ。このお方は私の救いのためにかけがえのないお方だという、イエス様に対するペテロの愛の告白。ペテロにとってのイエス様の意味づけ。それがあの言葉なのです。

これは「選び」という言葉の解釈でも同じです。人間が行う「選び」というのは、比較による優劣査定を前提としますね。「～コンテスト」とか「～コンクール」というので、「一位に選ばれました」となると、それは何人もの人たちの間で比べられて、一番優れた人になったという意味ですから、その意味で人間が行う「選び」には「比較による優劣査定」という概念が伴うことは明らかです。

ところが、神様が「選び」という言葉を用いられる時には、「比較による優劣査定」という概念は伴われない。それは、神様は人を他者と比べて優秀かどうかで私たちを愛するかどうかを決めるお方ではないからです。つまり、神様が愛の表現として「選び」という言い方を用いられる時は、私のことを神様がどれほどかけがえのない存在だとみなしているかの宣言だと理解しなければなりません。ここを間違うと偏狭な選民主義に陥ってしまいます。

＊

さてそれで、このような言語の使用法、言葉の使い方についての考え方の違いが聖餐式の理解とどのように関わるのかと言いますと、それは宗教改革時代におけるカトリックとプロテスタントの議論が、今日の聖書箇所として選んだイエス様の言葉解釈をめぐってなされたからです。

マタイ 26:26　また、一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、神をほめたたえてこれを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」

これは聖餐式制定の言葉とされていますが、教会の歴史における聖餐式についての論争、特に宗教改革の時代にカトリックとプロテスタントでなされた議論の中で、とても大きな争点となったのが、この「これはわたしのからだです」というイエス様の言葉をどう解釈するかという点なのです。「これはわたしのからだです」とはどういう意味だろうか。「これ」が何をさすか、「わたしのからだ」とは何か。「です・である」とはどういう意味か。そ

のようなことをめぐって議論がなされたのです。

ちょっとその例として、カトリックとルターの立場をご紹介します。本来ならばツヴィングリやカルヴァンの立場も紹介するべきなのですが、宗教改革時代の議論がリアリズムを前提としたものであることを理解していただきたいという目的ですので、カトリックとルターだけでご了解いただきたいと思います。まず、ローマ・カトリック教会は次のように言います。

> 神のことばの力はまことに強大かつ現臨的で、また生命力に溢れているので、神が語られることは、語られたとおりに現在する。そのみことばの一点一画でも滅びるよりは、天と地が過ぎ去るであろう。例えば、天地創造の初めに、神は「光あれ」と言われた。すると「光があった」（創 1:3）。見よ、神のことばはまことに力強いので、存在しなかったものまでも、神が命令を発せられたその瞬間からして、無より存在へと変わるのである。そうであるからには、キリストが「これはわたしのからだである」と言われるとき、パンの実体と本体とがキリストの肉の本体に変化しないはずがない。ある実体を他の実体に変えるほうが、無からある実体を作り出すよりも容易だからである。そこで、もしキリストが「これはわたしのからだである」と言われるのなら、それはキリストのからだのはずである。キリストは「これは…である」と語られたのだから、そうなのであって、この世の一切は消え失せ、このとおりなのである。キリストがマタイ８章３節で「きよくなれ」と癩者に言われると、その時から彼はきよくなった。同じように目の見えない人に向かって「見えるようになれ」と言われると、その時から見えるようになった（ルカ 18:42）。それゆえに、ここでもまた、「これはわたしのからだである、云々」と言われると、パンは肉に、ぶどう酒は血になるのである。

どうでしょうか。今の私たちが聞いても、このカトリックの主張は一応筋の通った言い分に聞こえますね。神が「光あれ」と言えば光があったとか、イエス様が「きよくなれ」と言えばきよくなったという聖書に書かれているのと同じように、イエス様が「これはわたしのからだです」とおっしゃったのだから、その通りだというわけです。

で、この理解を理屈で裏付けるものとして、テキスト的な説明もカトリックは行うわけです。カトリック教会は「これはわたしのからだである」という文を肯定命題文として理解しました。単なる日常の話し言葉としてではなく、「A は B である」という真理命題を記述したものという理解です。

「これはわたしのからだである。」という文は、「これ」という主語に「わたしのからだ」

という述語がくっついているわけですが、こういう「A は B である」という真理命題文においては、主語と述語は一致すると考えられます。そして、一致とは同一（アイデンティカル）ということだから、「これ」は「わたしのからだ」のことだと解釈するわけです。「これ＝わたしのからだ」という図式です。

つまり、カトリックの解釈によれば、イエス様が「これはわたしのからだである」とおっしゃった瞬間、そのイエス様の手にあったのは、すでに実体においてキリストのからだに変えられたパンだったということになるのです。確かに、マタイ 26 章 26 節を見ましても、イエス様は先にパンを裂いていますね。

マタイ 26:26　また、一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、神をほめたたえてこれを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」

パンを取って、「神をほめたたえて」すなわちお祈りをして、それからパンを裂いて、そして弟子に向かって「取って食べなさい。これは・・・」とおっしゃっている。ですから、この場合の「これ」というのは、すでに聖別が終わっているパンで、すでに実体がキリストのからだに変化したパンだというのが、カトリック教会の解釈な訳です。

彼らはさらに、次のような理由づけもします。「これはわたしのからだです」という文は、ギリシャ語では、τοῦτό ἐστιν τὸ σῶμά μου. ラテン語では、Hoc est corpus meum. なんですけれども、ここで「これ」という指示代名詞に用いられているギリシャ語（τοῦτό）もラテン語（hoc）も、どちらも中性指示代名詞なんですね。そして、「わたしのからだ」という部分の「からだ」（σῶμά、corpus）も中性名詞です。一方、普通の「パン」（ἄρτος、panis）は男性名詞です。だから、「これ」は「キリストのからだ」を意味すると考えることが、文法的にも正しいというわけです。

これに対して、ルターの場合「これはわたしのからだである」という言葉をどう解釈するかですけれども、「これはわたしのからだである」という文は「これ」「わたしのからだ」「である」の三つの要素から成り立っていますね。その中でルターは「である」という部分にこだわるのです。

「です」「である」というのは、日本語ですと単なる助動詞として読み飛ばしてしまいそうになる言葉ですが、西洋の言葉では、いわゆる be 動詞ですね。ギリシャ語では ἐστιν、ラテン語では est、英語だと is ですね。ギリシャ哲学時代からの「存在」と「生成」の区別。「ある」ものと「なる」ものとの区別のうち、「ある」ことを意味するのが、この be 動

詞だと解釈することもできるのです。

出エジプト記のいわゆる「燃える柴」の場面で、モーセが神様に「あなたの名前は何ですか？」と聞いた時、神様は「わたしは『わたしはある』というものである」とおっしゃいましたね。変な日本語ですよね。普通の日本語ですと、「ある」という言葉は物体に対して使われて、「いる」という言葉は動物に対して使われるものですから、「わたしは『わたしはいる』というものである」となるはずです。ところがここで「わたしはある」という訳がされているのは、ギリシャ哲学以来の「存在と生成」という対立概念が反映されているからです。変化するものじゃない。永遠不変の神。そういう意味を込めて「ある」という訳が使われているわけです。

Be 動詞にはそういう「存在」「実在」を表す意味合いがあるということなのですが、ルターの解釈にはそれが反映されていて、イエス様がご自身が手に取ったパンを指して、「わたしのからだ**です（である）**」とおっしゃった。「わたしのからだ**である**」と断言された。イエス様がそうおっしゃったのだから、この言葉が聖餐式におけるキリストのからだの「現在」を保証すると主張したのです。

「これはわたしのからだ**である**」とおっしゃった、そのイエス様ご自身の言葉を、文法的に正しく理解し、字句通りに解釈すれば、カトリックのような「実体変化説」など採用しなくても、キリストのからだが現在されることは、イエス様の言葉の確実性、聖書の言葉の真理性をもって十分に保障されると言うのです。イエス様がそう言われたのだから、その通り受け取ればいい。そのように主張したわけです。

いかがでしょうか。こういう議論で聖餐式のパンの意味を考えるというのは。「なんか細かいことにこだわってるなあ」。『これはわたしのからだである』という一つの文の分析だけで聖餐のパンの意味を探れるのか」と思えてしまうものですが、こういう議論がどういう意味を持つのか。そして、どうしてこんな議論が延々と続けられたのか、そして聖餐式の意味というのはこういう議論で考えるしかないのか。

それは、リアリズムに立っているとどうしてもこうなってしまうということで、ご理解いただけるのではないかと思います。

＊

じゃあ、リアリズムではなくフォーミズムで聖餐式を考えるとどうなるか。イエス様の「これはわたしのからだです」という言葉を、フォーミズムで理解するとどうなるのかをご紹介したいと思います。

フォーミズム的に考えますと、聖餐式において大事なのは、「これはわたしのからだです」と聞いて人は何を心に描くのかです。その言葉を聞いて生じる心情的な経験です。「パンと

ぶどう酒がいかにしてキリストのからだと血なのか」のメカニズムが大事なのではなくて、「これはわたしのからだです」という言葉を聞いて、どういう世界を心に描き、どういう共感・感動を持つかが大事なのです。

「雪が溶けたら春になる」と聞いて、「ああ～、そうだよなあ」と思う経験。冬がもたらす孤独とか貧しさとか苦労などに思いを馳せる経験。あるいは想像する経験。それが大事ですし、その思いの共有できる人の発見を喜ぶという経験が大事なのです。

ちょっとこのことを考えてみてください。言語表現というのは、それ自体は人間の外にありますね。一度放たれた言葉、書かれたものにせよ発話されたものにせよ、その言語表現は人間の外にあります。それ自体は、今日ではデジタル化できることからもわかりますように、客観的なものです。ところが、その外にある言葉が持つ「意味」は、ふた通りの仕方で立ち上がって来るのです。

一つは、放たれた言葉、書かれた言葉が、記号として機能するものである場合、その「意味」も人間の外にあると言えます。勝手な解釈を許さない。誰しもが同じ意味を見出すべき表現として機能するからです。例えば、コンピューターのコマンドコード。これは記号です。一つの言語表現が一つの意味しか持たない。A というコマンドに対しては A’の操作が意味されると決まっています。

というわけで、言語を記号のように使うリアリズムの場合、人間の主観は関係ない。いや、主観を入れてはいけないのです。「一方通行」という言葉には、交通法規上で一つの「意味」しかないですね。科学技術や情報伝達、法律などの分野における言葉遣いには、ほぼ言語記号論が適応できます。

ところが、記号としてではなく、詩や短歌や小説などの文学的用法で言語を使用する場合には、その言語表現に対する「意味」は、それに接した人の中に存在するのです。「雪が溶けたら水なる」という文では、言語が記号として用いられていて、その場合の「雪」は結晶化した H_2O の「意味」しか持たないのですが、「雪が溶けたら春になる」という場合の「雪」は、結晶化した H_2O を「意味」しているだけでなく、他にもたくさんのことを「意味」するわけです。

冬の寒さ、外気の冷たさ、空の暗さ、閉塞感、雪かきの大変さ、家族以外との交流が減ること、外の仕事がなくなること、出稼ぎに行った父親のいない寂しさ、手足の霜焼けなど、さまざまな事柄を連想させます。そして「春」という言葉も同様に多様な意味を持ち得ます。だからこそ、読んだ人がどんな世界をそこから読み出すか、どんな世界を心に描くかが違って来ますし、その心に描いた世界に自分が入り込んで共感したり感動したりすることが生じるわけです。

言語表現を記号として読むのでしたら客観的に何が言われているか解明して、「意味」を限定していくことが可能です。そして限定することに意味があります。ところが、言語表現を記号（サイン）ではなく詩的な言葉として読むなら、客観的に何が言われているかを解明するのはむしろ野暮です。そこで用いられている言葉の「意味」の多様さこそが命ですから、分析して解明することは、むしろその言語表現の味わいを失わせることにしかならない。

聖餐式の議論をする時に、「これはわたしのからだです」とイエス様がおっしゃった言葉を、記号論的視点から分析したり議論したりしてしまったのが、歴史上の神学議論の大いなる的外れを生んだと私は思っています。「これはわたしのからだです」は、イエス様が発した言語記号ではないです。これは「わたしはいのちのパンです」とか「わたしが与える水を飲む者は、決して渇くことがありません」とか「わたしを信じる者は死んでも生きる」というような言葉と同じように、愛のこもった詩的なメッセージです。

「空の鳥を見なさい」「野の花を見なさい」「一羽の雀さえも神は覚えておられる」イエス様の言葉には詩的表現が溢れていますね。

聖餐式に臨む時は詩心を大事にしたいもんだと思うのです。「取って食べなさい。これはわたしのからだです」というイエス様の言葉から、イエスの受けた苦しみの意味、その死がもたらした意味、そして、その復活がもたらした意味など、数多くの意味を心に思い描けることが、私たちに命を与えるものであることを覚えたいと思います。

「神は人の心に永遠を与えられた。」（伝道 3:11）――永遠は心に与えられるものであって、外界に存在するものではない。これをまさに大事にしないといけないと思います。